



阿
安
永
實
錄

貸
佳
吉
屋
本
卯
年
衛

六

^ 13
3362
18



13
3362
18

院之母あし

市川左衛門次

市川團十郎

二十五
貸住吉屋
本卯共衛

安永実録傳巻之拾八

大正十年八月廿九
本大出山蔵
贈



目錄

一 甲申定五節古依五のそ病氣

新龍舟

漢地紀花河別葛那里見村

之類 款のふぐりまどら約事

茶磯榮

阿 安永実徳傳巻の拾八

田中一定右衛門左衛門 痛気起り

難儀の事 漢語 仙花阿列若耶

り 立戻り 款の事 中 右 事

去程より 田中左衛門 将定右衛門 父

此 款 依 着 大 事 乃 好 傍 々 約 々 々

布 巾 衣 衣 々 々 款 の 首 々 々 門 提 々 々 々

の 菓 所 々 々 向 々 々 々 衣 襪 輪 田 々 々 々

深き諱斗に之を定むる暇の安ら成
海のおもむき物の中を去りしは
福田の斗のめて浦神他をより活力の
考と定むる所は彼として人知る深き
筆はぬり宛不なるに終路に既さ
きり此を安永元年二月十五日定む
今年十九日申すれは三階の御
りしもの母親のくはせけし人し置

宿氏御と誓う古く其の意と極め
くはせけし人し置と決列海本
と立むる所が先古伝の由り是れ
之東明礼の安あまはば八十八ヶ所の
奇くしり年ありしれを納め佛神の如く
波初り着る尾より中を連せん
せけし人し置は仕洲の穂の足より
御伝親りしははるく古伝を東

寺を去りし頃わがき老を
 身は毎夜打良五月申中以霖多し
 漬ししも多し此の海を旅路ゆき
 され六風の吹月も雨降る月といふ
 なる札ありのちこは糸街しそ暇
 同老をりしし及る士女路を印
 食神のまはれぬるもんはけしそ
 うにり似る者ありや依る太古の
 紙りやさるんを同紙りて
 若せしを松をいふ年万若しりし
 子一耕多しつぎ風を成しそ
 祈しそそ身落るる所さるる風
 のありし定む印後中紙にひか
 多し此世活めしそ糸の醫師し
 と文さるる醫療もそそ
 龜角後の下りし事移る既し
 瘧病と

いふ處を客辨くして居る所下りりたれは日
くも暮くして上様も言へるに合はる事
をまは供せし液神化をちのよき事
りや又妻をふかひいふ事せしむる
所をて鬼角是の指田の物候とて告
ふせ處し細く書面を徳に改ふ
物候と立んとせしが定む所を物候す
事より指候子といふ事候所のこと

日一書候所候素とあつらん之れ也
なれはさうて物候と云ふ指田のい
候言をせしむる候と云ふの事候
言をいふ事候候と云ふ候と云ふ
候に云早候なり候中候候候候候
候の候の候の候の候の候の候の候
言をいふ候候候候候候候候候候
事也候と候候候候候候候候候候

幸也とて若くは世に福由ありて事業
事終るん我若運命をて死するが如く
是非ありてそ付るより遠り中絶し
我存命の内をたていりての事なり
とて教と討ぐる内をたてて居るを
ふかしく思ふなりと他を思ふは
善くと抄るるもかきわく傳ふ病は
りねる定み節ありて云々

きんちの流る流る流る流るの仙花も
んよの君乃出んて能くそ志と
仙花も感意をて遊舟快音と如く
一と向くんとすく舟抱し
傳ふ一公自身節の念力を佛神も細
文りりり多難もや消去く平杖方に説
術と技とてありてありてありて
仙花世新とてありてありてありて

むきききよなるんぞまじりし連者
明りききよなるんぞまじりし連者
正に止り終る幸の我は是より千町
布と糸の方少くす苗村に子地の若
なりぬる月夜に立すり我あり方
一宿して明り強さを我に下しと
中者まじり定まる節仙花法とも
鏡の識り出原の正初ふ是より

一佛神の出入念成下して彼高人
と向はれもく彼村にあり一宿しきり
神は出入念成高人して正しく向はれ
していついりりたる正しく安んぶえと
月布の正なる節佛檀よむ念念佛
して一樹のうけ一夜のやどりも
こそありきと名の鞆村中念佛と
あ一分念も正しく伏せおれ

色^つ部^ぶめ^めは^はす^すり^り我^わく^くも^もの^の物^ぶを
この目利^{めり}は^は其^{その}意味^{いみ}と^とま^ます^すこの^{この}代^{しろ}に
親^{おや}の^の代^{しろ}り^り古^{ふる}及^{およ}鼻^{びな}高^{たか}堂^{どう}な^なれ^れに^に
の^の物^ぶり^り限^{かぎ}ら^らず^ずは^はお^おも^もす^すも^も賣^うり^りと^とて
何^{なん}も^もの^の物^ぶり^り時^{とき}あ^あら^らず^ずと^と買^かひ^ひと^とま^ます^すに^に世^よの
中^{なか}の^の事^{こと}は^は目^め利^りと^とま^ます^す買^かひ^ひ
と^と賣^うり^りと^とま^ます^す利^りと^と買^かひ^ひと^とま^ます^す
何^{なん}も^もの^の物^ぶり^りと^とま^ます^す換^かへ^へと^とま^ます^す

それと物^ぶは^は目^め利^りと^とま^ます^すは^は代^{しろ}り^り
と^と買^かひ^ひと^とま^ます^すと^と買^かひ^ひと^とま^ます^すあ^あの^の代^{しろ}り^り
も^もあ^あら^らず^ずの^の代^{しろ}り^りと^と買^かひ^ひと^とま^ます^すは^は代^{しろ}り^り
い^いか^かど^どの^の物^ぶり^りと^と買^かひ^ひと^とま^ます^すは^は代^{しろ}り^り
と^と買^かひ^ひと^とま^ます^すは^は代^{しろ}り^りと^と買^かひ^ひと^とま^ます^す
我^わく^くも^もの^の代^{しろ}り^りと^と買^かひ^ひと^とま^ます^すは^は代^{しろ}り^り
何^{なん}も^もの^の代^{しろ}り^りと^と買^かひ^ひと^とま^ます^すは^は代^{しろ}り^り
か^かの^の代^{しろ}り^りと^と買^かひ^ひと^とま^ます^すは^は代^{しろ}り^り

是は紋の付くときさしひかへく乃
定紋ありしを後物においりしれ
とていふことなきなり我もちひよか
つと物よりそ味感入る物よりりり
定を命んやゆき記相りしをまき
鄙の土地とて捨棄すしてても二高と
取ら成るべき後物に下りたり
ものつれ去るも是より款の手がかり

なりしと申すはなりしつめや
今我を歩の利と分りて三分を
屋しといふ事ありしを中しやれ
事なりしをいふ事ありしを
順礼の事なりしを後物といふ
後物や別と申すは
順礼同士の老後の物と申すは
法をたよりしと申すは



そ後をいふめて義をせりあは
くそ禱の物り幸ひそねがし家の定
後身そりり是祈うくくうそ業
我りより武也少多と多き方のせ
牙ならぬた教年の病身や武の屋を
移れう髪り祈祈どもんそ業んそ
祈のどくくアま也玉明礼回者と成
事そ我そ人乃知少の悴あり何そ佛

祈のか後どのの悴と武士そ
んとの我ん那なり物り今まの業
が教乃定後付くも編がそそ事
そ今も我んの那くも此佛神細者
了我えの武士り立ゆる益も瑞お成
ん物もまも家そ病身のものねまはと
由縁りてはいお家道せそ悴と武
士りそまんそ何そ家定の後付る

辨振るる瑞相を奉^すの徳^{とく}り依^よる^る武^ぶ
色^{しき}のお世^よ立^た身^みか^かん^ん成^なり^る成^なり^る依^よて
今^{いま}家^かを^を分^われ^れ利^りと^とり^りと^と旅^{りょ}客^{かく}と^と分^わり^り
賞^{しょう}り^りの^の由^{よし}なる^る中^{ちゆう}そ^その^の由^{よし}なる^る為^{ため}物^{もの}の^の
中^{ちゆう}と^と隠^{かく}し^しと^と取^とり^りす^すと^とさ^さく
り^りの^の我^{われ}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
々^々の^の事^{こと}と^と我^{われ}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
の^の事^{こと}と^と我^{われ}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
の^の事^{こと}と^と我^{われ}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}

物^{もの}れ^れと^と利^りと^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
て^て賞^{しょう}り^りの^の中^{ちゆう}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
中^{ちゆう}の^の高^{たか}貴^き名^な利^り高^{たか}人^{にん}の^の物^{もの}利^りと^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
何^{なに}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
賞^{しょう}の^の方^{かた}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
何^{なに}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
より^{より}事^{こと}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
賞^{しょう}信^{しん}と^と分^われ^れと^と余^{あま}後^ご形^{かた}中^{ちゆう}
賞^{しょう}途^と中^{ちゆう}見^み

智ちかみの詮せんの爲ためにかゝる徳とくの物ものなり
の事こと止とどますと故ゆゑすしと書かりしは此こゝの
各おの名なとていねいなる事こと勿な得えず徳とく人ひと
なりとある事こといふ方かたもまされし事こと
考かんふに阿あ列りゆへ何なにも立たつものあり常とこに
そあらむしやとて詮せんの味あじもか
る事ことありし事こと考かんふに常とこに
此こゝの名なとていねいなる事こと勿な得えず徳とく人ひと

と利とを妻めかけて中ちゆうに流ながる事こと都とて
なる事こと高たか人ひととて又またも海うみ也なり也なり也なり也なり
今いまに徳とく具ぐ使してある事こと性せい面めんとて出い
る事ことも明めい和わ九年くわんねん三月さんげつ海うみ
阿あ列り葛くわ野や里り見み村むら古こ右みぎ具ぐ
や久くを傳つた方かたより合あ武ぶ方かたとて常とこに
浪なみ作つくり朱しゆの徳とくを以もつて白しろ小こ書かき付け
所ところにありし事こと是こゝに記ししてありし事こと

鳴

博ふ商人と又捨おそるの遊縁ん
ト入らう旅のごくお如由ふかせを
我とらんきえとて考とてと先か
右の名ふいとおりあるてはは幸い款
此手かたり也と懐中しと夫より巧と
● 左とて波菖那屋見村一紙と款の
手かたりとせんさくせん波菖と云
おしとしかく定み而病存病めと

かり成ぐと辛字の神様まの依せ
し他花伝と中けふの神く河列菖
那屋見村と云のり凡て中屋あり
あると母君の病後の身とていけ
彼不いあり事成ゆんいらぬとあま
経るにとて身持つる是れ非なる
次を理むとあまかりし路りけし
程も身持つるはと成屋と云

又〜傳^{つた}と^り及^つる^るは^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 め^めひ^ひの^の中^{なかに}に^にも^もの^の傳^{つた}と^り及^つる^るは^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 て^てか^から^らな^ない^いは^はな^なり^りと^と傳^{つた}と^り及^つる^るは^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 ぬ^ぬん^んと^とそ^その^のつ^つと^とん^んに^には^は我^{われ}と^とは^は
 由^{よし}の^の故^{ゆゑ}に^に傳^{つた}と^と及^つる^るは^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 と^との^の不^ふ可^かと^とは^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 是^{こゝろ}より^{より}傳^{つた}と^と及^つる^るは^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 傳^{つた}と^と及^つる^るは^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し 病^{いひ}後^ご

あれ^{あれ}は^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 り^りその^{その}を^をな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 新^{あらた}用^{もち}い^いは^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し
 卒^{ついで}に^には^はな^なり^りて^て喜^{よろこ}ま^し

なれば是れ我のいひおかしからし御と
人か性名も新しといふあやうらうら
慈母の事方付と申す御へ其言乃
事おと便再成しといひ若くせう御法
なりと申すも此の定む御亦くうづき
いとおお面御の御いれりきと申
然しと御へ所と申す御あやあり然
くともありは汝れも是は是れを奉り御
は汝れも是れは是れを奉り御

汝れおめて定む御也然しして云ん
とせしが御より定む御も然しと
そんく御のいひおかしからし我
留り此内よりのありは是れもけりては
いへせんといふは是れをいへて云ん
と御かこくをいへて定む御いへて云ん
然しと申すも此の定む御も然し
我れ御汝れもいへていへて云ん

魚をいざやとらぬの立派なりえんもんの
中め、是より世世の修むる成るも志守
と定むる神と化居る教とほくく打傳
只に信候とぞしとせむる教とそ
むけく神とつみ態とて名成あらうが
いりぬ化居る油運別とて却て中居る乃
さゆとけ也油きりどらんきりぬ我々
より油取くいと奉油取あましり

我傳りては文會——と物後なりとも
定むる知がけ一とて流るる名所と惜し
あつる化居るも今と修方好く去る
はととく知るとしか——と油取とて修
な只佛神と修り業と取りのかごと
はのまて——とていりぬ名所とて
あつる化居るも今と修方好く去る
はととく知るとしか——と油取とて修
な只佛神と修り業と取りのかごと
はのまて——とていりぬ名所とて

く〜と潤くおあり〜世のちて首成
このとも方物か彼他我我徳代の歌
来とらふあま〜は栢田房の四修成
しと我志年みくき人徳と何んら
この道中えわりの為所と〜あ
この成り〜神り大我ふ〜自から〜ね
此〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
右は栢田との眼力と〜〜〜〜〜
談

右貞節の所他他我〜と彼〜
の何り〜と〜〜〜〜〜
又〜〜〜〜〜
と〜〜〜〜〜
さば〜〜〜〜〜
〜我と中〜〜〜〜〜
すい〜〜〜〜〜
定〜〜〜〜〜

一

未孫の我々推舞の如くは
らんうけはるる名孫と行む
まらき旅の如くは玉隔て我
くうき旅にやれまの別を
おふまなひはあつて名孫とし
るる未孫のうけはるる我々
わらうとすりやれはるる我々
洗ひうけはるる我々

何と云ふも我々たるは身も
後の子がまはるるは
けはるる浅野はるる我々
と云ふもせのうけはるる
肉又まの佛檀の向ひ南無父母の
不重なる我々のうけはるる
二親の款はるるはるる
うけはるる我々のうけはるる

三折ども一病をば張る勢あり
中平氏遂に首尾を討つ
肩よりを世世骸又再の首尾を討つ
なり我意一とそこの事い
なり首尾を中平とけりるを六
た之骸と粉り碎りしをい
る科よりしとそこの事い
そ付こそ首尾を速く罪と清
魚

中平を討つるを父
霊を討つるを心
念佛しむるを
心をなす



金
五
二

流安永実伝巻之十

才
心

